

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

平成29年度 活動報告

本プロジェクトは、「森村泰昌アーカイブ」と「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」を結合して再編成したものである。

森村泰昌アーカイブは、新聞記事を中心に整備し、文字データは80年代から1996年まで、画像は80年代から1993年までと1995年を入力した。また、昨年度より芸術資源研究センターにて公開中の森村泰昌関連資料データベースの改良ならびにデータの修正追加を行って、より使いやすく内容も充実させ、資料の活用について検討した。

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究では、昨年度末に井上隆雄氏のスタジオから元崇仁小学校に資料を搬入し、以降資料室の環境整備を行っている。本年度は、まずは資料の全体像の把握を進め、どのような資料・素材があるのか、またどのような視点での分類と資料研究が最適なのかについて検討することとした。4月から9月にかけて、全箱のチェックを行い、マウント、ポジ、ネガ、プリントといった素材の把握と撮影対象を確認した。結果として、井上隆雄氏の撮影対象は、仏教美術・京都の文化・美術関連・国内の風景・海外の風景、文化・アジア諸民族の生活の6ジャンルに大別されることが分かった。

これらのジャンルを踏まえると、本資料は、美術領域だけではなく、むしろ文化史に関わる利活用の可能性を有するものと判断できる。そこで特にインドのラダックやビルマ関連資料の調査と分類を重点作業に位置付けることとした。

また資料調査だけではなく、7月より井上隆雄氏の写真作品の撮影とリスト化も進めている。井上隆雄氏の写真作品に関しては、4月以降も複数のギャラリーや下鴨神社での展示企画の話があり、作品や資料の貸し出しを行っている。今後も予定があり、作品のデータベース構築が急がれる。今年度中に井上隆雄氏の作品撮影は終える予定であり、次年度は井上隆雄氏が購入あるいは譲り受けた知人の作品のリスト化を行う。木村秀樹先生や清水九兵衛氏の作品もあり興味深い。

資料の全体像が把握できたため、9月より情報発信のための広報活動を開始した。デザイン科の学生にも参加してもらい、活動紹介のためのリーフレット・フライヤーを作成、配布している。実際に12月、2018年の1月に京都国立博物館や大学の保存修復家、研究者の来訪があり、海外の仏教美術資料を共同で調査する機会を得た。仏教美術関連やオセアニア、インドネシアなどのアジアの民族資料は、今後も重点的に資料調査を実施する。またこのような他機関や研究者との連携を想定した運用体制のより一層の整備が必要である。

このような情報発信を通じて、本プロジェクトはアーカイブ及び資料研究に関する人や知が集積する場の形成も目的としている。そのため、調査や広報だけではなく、12月9日には第19回アーカイブ研究会を開催し、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] の伊村靖子氏をゲストに迎え、60年代から70年代にかけての日本美術の動向から、作品を超えた資料研究の意義について議論した。また2月7日-11日にかけて、京都市立芸術大学の制作展と同時開催で、「京都芸大「今熊野・岡崎学舎」井上隆雄写真展」を開催し、未公開資料や本プロジェクトで扱っている素材を併置するアーカイブ的な資料展を実施し、活動の成果と意義を提示した。

今後も森村泰昌アーカイブは、引き続き新聞資料を中心に、1994年、1996年以降の入力と検索システムの改良を予定している。また井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究は、重点資料の調査と運用整備を並行して進め、写真資料からの美術・文化史研究への方法論をより多面的に検討していく。

山下 晃平（美術学部非常勤講師）